

## 第1講：元のいんねん

安井 幹夫 Mikio Yasui  
佐藤 孝則 Takanori Sato

「いんねん」という言葉は、仏教的因果論、江戸時代の心学などによって、因果応報譚として人びとの間に膾炙している。たとえば、「因縁因果といふも、朝から晩まで、我なし行うた善悪の差引残りが、則ち今日の姿、今日の差引残りが明日の姿…。是が則ち天の道じや」「善をなせば善が生え、悪を行えば悪ができる」として、「一々、その幸不幸について、過去の因縁というもの」と説教している。こうした因縁因果の話は、科学的な思考に因果律が不可欠であることもあり、なお説得力を保っている。

心学それ自体は、民衆の処世訓、生活倫理といつてよい。そこに説かれる因縁因果の話は、ややもすると天理教の話と同じだ、と短絡的に理解しかねない。

この点について、親神は「今までも心学こぶきあるけれど元を知りたるものはない」と、きわめて明確に神の話と心学との違いを明らかにしている。つまり、人間・世界の「元のいんねん」が分かることが根本である。しかも、天理教の「いんねん」を考えていく場合、「元のいんねん」と、それぞれ個別の「いんねん」とに、大別することができる。

「おふでさき」をみていくとき、13首に「いんねん」の語を見いだせるが、そのうち8首が、人間元はじまりに関わつての話である。あと4首が個別の場面でのもの。

「元のいんねん」を人間に知らすために、親神が顕現した。それは人間の救済のため。すなわち、親神の目指す救済は「元のいんねん」を知らずに成就するものではない。したがって、この「元のいんねん」を伝えていくことが布教伝道の目的となる。

個別的なものとしては、「いんねんというは心の道、」（さ40・4・8）といわれる。人間の心遣いがそのままに、いんねんを形成していくが、その心が「元のいんねん」根拠づけられるところに、救済の道がひらかれる。

いんねんを考える場合、それは固定したものでなく、どこまでも親神の思惑のなかに生きることが大切である。

(安井幹夫)

私たちは、以下の三つの「いんねん」について、しっかりと自覚する必要がある。

一つ目は、親神は人間が「陽気ぐらし」をするのを見てともに楽しもうとの思召から、人間世界を創造された。以来、全世界、すべての人間に「陽気ぐらし」をさせようと、教祖を「やしる」としてこの世に現れ、救済の道を教え、たすけをされている。この親神の御心とさまざまな働きによって、人間世界の全ては守護されている。(▶「元のいんねん」)

二つ目は、人間は親神によって創造されたが、人間の魂は親神から身体を借りて人間として存在している。(▶「かしの・かりもの」) また、身体の運動やそれに伴う外部への行為・働きかけの主体は心であり、心は魂に属する。(▶「心一つが我がの理」)

三つ目は、人間は一代かぎりではなく、何度も生まれかわり出かわりをする。(▶「出直し」) そして、それが何度も繰り返

されるうちに本来の魂に良きも悪しきもそうした心遣いが集積し、親神はその状況に応じて守護くださる。ただ多くの人間は、「陽気ぐらし」とはほど遠い生活を送り、親神の思召のままの守護を受けられなくなっている。(▶「心のほこり」)

1997年2月27日付『nature』に、体細胞由来の「クローン羊・ドリー」誕生の論文が掲載された。著者は、人間の未熟児用特殊粉ミルク等の開発をおこなっていた英国・ロスリン研究所のイアン・ウィルマット博士である。成獣の羊から乳腺細胞(体細胞の一つ)を取り出し、その中の細胞核をあらかじめ除核していた別の雌羊の卵子の中に移植して初期化させ、さらに電気刺激で細胞分裂を促してクローン胚とし、その胚をまた別の雌羊の子宮に入れて子羊・ドリーを誕生させたのである。その間、雄をまったく関与せずに3頭の雌だけでドリーを誕生させたことに、世界は大きな衝撃を受けた。これは家畜だけでなく、「クローン人間」という人造人間を作り出すことを可能にした技術である。

2007年11月20日、「京都大学・山中伸弥教授らのグループがiPS細胞を作製」という衝撃的ニュースが、世界を駆け巡った。このiPS細胞は受精卵を破壊して作製されるES細胞とは異なり、皮膚などの体細胞に遺伝子を導入してつくられるが、胎盤組織を除く身体のさまざまな組織や細胞をつくり出す能力(万能性)については、ES細胞と同じである。ただiPS細胞の場合、使い方によっては、難病患者の治療やオーダーメイド創薬として利用され、今後の医学・薬学に貢献する可能性は非常に高い。一方で、男女それぞれの体細胞からiPS細胞をつくり、それらから精子や卵子をつくらせて受精させ、その初期胚を女性の子宮に着床させることになれば、iPS細胞由来の人造人間をつくることにもなる。それは、体外受精で生まれた人間のように、生殖行為を伴わない人間の誕生を意味し、「クローン人間」とは異なる手法の人造人間の誕生を示している。

クローンやiPS細胞の作製技術は、それを利用する人間側の目的や用途によって有害にも有益にもなるのである。それは、親神から「心の自由」が与えられているゆえ、人間の自由な判断によってそれらの技術をどのようにでも利用できることであり、「諸刃の剣」であることを示唆している。いずれにおいても、「115歳が定命」と教えられるなか、クローンやiPS細胞の技術は教理の視点からどのように理解したらいいのか、これらの技術はあくまで「修理肥」の範疇でしかないのか、「陽気ぐらし」実現のなかでどのような意味をもつのか等、今後も注視し続ける必要がある。

出生や出直しの「いんねん」、そして「かしの・かりもの」の理をしっかり心におさめたならば、人間が我欲によって出生や出直を制御することの是非は自ずと判断できるはずである。さらに「心一つが我がの理」という教えをしっかり心におさめ、「十全の守護」を悟っていつも感謝の心で通るならば、親神は私たちを世界たすけの先頭に立ってお導きくださる。今こそ世界に「確かな抛り所」と「元なるをや」を知らしめ、「世の立て替えを図るべき」重要な節目ではないかと考える。

(佐藤孝則)